

13

ウィットントン病院の設立

柳澤 波香

東京都新宿区

ウィットントン病院 (The Whittington Hospital) は1948年、地域中核病院としてロンドン北西部のハイゲイト・ヒルに設立された総合病院である。同年は英国で国民保健制度 (NHS) が施行された年であるが、ウィットントン病院は、既存の近隣の三つの病院を統合し設立された。各々の病院の設立の背景、変遷と統合の過程は、NHS 誕生に至るまでの英国の複雑な医療事情、病院の設立と再編成の歴史を表象している。

ウィットントン病院の前身である三つの病院のうち、最も古い病院は1745年創立の天然痘病院 (The Smallpox and Vaccination Hospital) である。天然痘患者の収容と種痘接種を行なう篤志病院として、当初、ロンドンのトッテナム・コート・ロードに創設され、後に増床の必要性からキングス・クロス駅隣接地に移転した。ジェンナーに協力し、種痘の普及に尽力した内科医ウィリアム・ウッドヴィルはこの天然痘病院で診療にあたった。病院は1848年、駅の拡張工事のため、郊外のハイゲイト・ヒルへ移転し、100床の新たな天然痘専門病院として開院した。1855年から5年間続いた天然痘の大流行時には、延べ1,185人が入院した。

19世紀には様々な専門病院が篤志病院として相次いで設立されたが、1860年代に入ると、救貧院の収容者に対する医療の質の向上、改革の必要性が慈善家や医師らにより力説され、首都救貧法が制定された。同法は貧者への病院医療の提供を国家の責務とするもので、NHS法の原点と見做されている。救貧院には別棟として病院が建てられ、救貧院収容者のうち病人、病弱者を収容した。天然痘病院の近隣にもハイゲイト救貧院病院とホルボーン・ユニオン救貧院病院がそれぞれ1869年と1877年に創設された。救貧院病院では医師が常勤の管理者となり、院内の医療を監督した。また、看護婦の養成も重視された。ハイゲイト救貧院病院ではナイチンゲールの助言により早期から院内に看護学校が設立され、高い評価を得た。救貧院病院の設計には高名な建築家が関わり、換気、病室や衛生設備の配置には細心の配慮がなされ、ホルボーン・ユニオン救貧院病院は壮麗なパヴィリオン様式で建てられた。

19世紀末、天然痘患者数が激減したことから、天然痘病院はハイゲイト・ヒル救貧院となった。更に1930年、全ての救貧院病院が閉鎖されたことに伴い、ハイゲイト・ヒル救貧院病院はセント・メアリ病院に、また、ハイゲイト救貧院病院はハイゲイト病院に、ホルボーン・ユニオン救貧院病院はアーチウェイ病院となった。

両大戦間期および第二次大戦時に英国の病院は構造的な転換を強いられた。医療は地域単位で集約化が図られ、戦時中は救急医療体制の構築が優先された。セント・メアリ、ハイゲイト、アーチウェイの各病院でもベッド数の削減、外来と理学療法部門の閉鎖が行なわれた。このため、戦後、1945年に三つの病院が一つの病院に統合されることになった際、病院長C・コイルはじめスタッフは設備の拡充、医療体制の確立に非常に苦心した。

1948年、NHS 施行と共に開院した新しい病院の名称は、中世のロンドン市長リチャード・ウィットントンに因んで名づけられた。貧しい孤児であったウィットントンが志を立てた場所が病院の至近距離にあること、彼がらい病者や貧民の救済などに尽力したこと由来する。病院のシンボルはウィットントンに幸運を授けたといわれる黒猫で、ひろく人々に親しまれている。

なお、天然痘病院時代からの建物はウィットントン病院の事務棟として現在でも使用されている。また、ハイゲイト救貧院病院の建物はウィットントン病院のメンタルヘルスセンターとなり、ホルボーン・ユニオン救貧院の建物は糖尿病部門および内分泌疾患部門として現在も利用されている。